

15年の変遷から読み取れるもの

白梅学園大学教授 無藤 隆

1 層の変化

この15年間で対象となる層が変化してきている。標本の抽出の仕方はほぼ同様で、乳幼児をもつ保護者が対象であり、その大半は母親である。だから、その変化とは乳幼児をもつ母親のあり方が変わってきていることを示している。

それは保育園の在籍の子どもが増えていることであり、それはとりもなおさず、働く母親が増えているということである。実際、文部科学省・厚生労働省の統計でも、幼児の保育園の在園率はこのところ年々上がってきていて、就学前の5歳の段階では、保育園の子どもが4割強で、幼稚園の子どもが5割強（実際にはそのどちらでもない保育施設に入っている子どもがいるが）となっている。近いうちに、保育園と幼稚園と半々になり、さらに保育園の子どものほうが増えていくのも時間の問題であろう。とくに、待機児童対策が進めば、保育園率は上がっていくはずである。

日本は国際的にみて、専業主婦・専業母親の率が高い国である（韓国や台湾も高いが）。それはとくに欧米や共産圏の国と比較して著しい特徴となっている。実際、小さいうちは家で子どもの面倒を見ていたいとする女性の比率は今なお高い。

だが同時に、女性の就業意欲も高まってきている。そのためにそもそも結婚しないとか、子どもを作らないという場合も出てきているようだ。何より保育園に預けることが難しいし、預けるにしても、父親が家に帰る時刻が遅く、また父親の育児・家事分担率が極めて低い。

国の施策と相まって、これから次第に女性・母親の就業率が上がっていくだろうし、育児との両立を求める人も増えていくのではないか。そのことが子育てや幼稚園・保育園のあり方にどう影響するかはまだ見えてこないが、少なくとも母親のストレスのあり方を変えていき、さらに幼保の一体化の動向を強化することになるだろう。

母親の就業率の高まりと並行し、相互におそらく絡み合っているのが、本調査対象者における女性の四年制大学（以下、四大）卒業の比率の増加である。すでに男性は四大卒業者が半数ほどになっているのに対して、急激に女性がそれに追いついてきている。女性はとくに短期大学（以下、短大）進学者が多かったのが、このところ、とくに首都圏などを中心に、四大進学者の比率が上がってきているのである。それは全般的な高学歴志向が女性にも高まってきたせいであろうし、また女性においても四大卒業であることが必要な、あるいは望ましい職業に就きたいとするようになったのかもしれない。そのことはまた女性の価値観の変動とも連動していくのではないか。

2 経済的困難の影響

2009年と2010年は景気の後退が世界的に起きた時期である。前回調査の2005年は景気が回復してきた時期にあたる。とくに今回の調査時期は2010年の3月であるので、「子ども手当」が支給される前でもあり、子育て世帯の多くは収入の低下に直面していたに違いない。

だとすると、とりわけ教育費の支出は困難

になりそうである。生活の衣食住などの経費は削りにくい。だが、とくに幼児のおけいこ事や塾や通信教育などは小学校受験をするのでもなければ、いわば不要不急である。まずはそこから削っていくということはありそうに思える。そういったことはとくに世帯収入が低い層に顕著であることも見出されている。2010年調査では収入による教育費の支出の差がみられている。

もっとも、そのことが経済的に低い層の子どもの将来に重大な問題を起こしうるかどうかはわからない。幼児期の塾やおけいこ事は不要であるとか、将来の教育にとくに役立ちたくないとする立場もあるだろう。逆に、そうすることが子どもの将来の、とくに学校教育の成果を高めるのに有効だとする立場もある。おそらくそういった活動をしないなら、それに代わる何らかの豊かな活動が保障されるべきであろうが、それが可能かどうか。単に家でぼんやりしていればよいというわけでもなさそうだ。そういった意味で、幼児期の教育費の支出格差が将来の学力などの格差につながるかどうかはまだわからないが、その可能性も否定できない。

ところで、こういった大規模な社会変動が子どもの成育にどのような影響をもたらすかは社会学や発達心理学の世界では以前より注目されてきた（たとえば、『大恐慌の子どもたち』はアメリカの1930年代の大恐慌の影響を扱っている）。おそらく今回の不況が長引くにせよ、いずれ回復するのではないかと思われるので、あまり激しい変化を家庭やその養育のあり方に及ぼさないかもしれない。しかし、こういった時代の動きによる影響が教育費の支出という一端に出てきた点は興味深い。

今後、そういった影響はとくに経済的に困難が大きい世帯の行動や考えを変えるのかどうか。また他の世帯にも影響は及んでいくのかどうか、引き続きの調査による検討が必要である。

3 幼児の生活の健全化

幼児の生活が「健全化」してきたと言ってもよいのではないか。健全という価値観を伴う言い方が適切でないなら、識者によって望ましいとされる生活の仕方に近づいてきたということである。

まず、早寝早起きが増えてきた。これは早寝早起き運動が盛んになった成果かもしれない。もっともそうではなく、単に朝、忙しく仕事に出る母親も増えてきて、早く保育園に送り出すため、前の晩から早く寝させるようになったのかもしれない。ただ、幼稚園に行く前の小さい時期でも早寝早起きの傾向になっていることや、幼稚園児でも早寝早起きの傾向が進んできていることをみると、世の中全体の動きである可能性が高い。

またいろいろな調査項目で全体としてきちんとしつけようとする傾向も強くなってきたと読み取ることができる。親が子どもと遊ぶ際にも多様な遊びをするようになってきているようである。これも望ましい方向だと言えるだろう。

ただし、遊びなどは母親が中心となっているようである。おそらく土日は父親のかかわりも多いに違いない。ふだんは主に母親がかかわり、子どもと遊んでいると、遊びにしても大人側の望ましさの判断が働き、いろいろな遊びを意識的に導入するようになっているのかもしれない。ただ、他の子どもとの遊びは家庭においては少なくなっており、少子化の影響でもあるだろう。その分、園での子ども同士の遊びへの期待は大きくなるを得ないのではないか。

4 女性の仕事志向が増す

すでに述べたように、調査対象の層が保育園の通園率が高くなり、また四大の女性が増えてきている。それは日本全体の傾向と見合ったものでもある。

保育園の通園率が高くなることは、保育園

への期待が高まることでもある。すでに保育所保育指針が改定された折に、保育所の保育は「養護と教育」を一体的に進めることであると定義されている。幼児教育は今や幼稚園と保育園の双方が担うものとなっている。

そうであればなおさら、保育園に幼稚園と同等の幼児教育を保護者としても期待するようになるだろう。その動きは顕著になっていくのではないだろうか。また、幼稚園においては預かり保育などを通して、保育園に近づき、長時間保育を部分的に可能にするようになってきている。いずれの動きも幼保の一体化を実質的に進めるものである。国の政策の変化と相まって、これが乳幼児の生活をどう変えていくか、また母親の行動や意識をどう変えていくかは見守っていく必要がある。

女子への学歴期待も上がってきている。女性の仕事志向が増しているのではないだろうか。自分がたとえ専業主婦であろうと、子どもには女子でも、将来は高い学歴を経て、仕事をしてほしいと思う母親が増えてきている。とはいえ、その一方で、高卒・短大卒でよいという母親も半数ほどはいることも無視できない。

ともあれ、今の動きは将来、日本の社会が共働きを基本とするか、ごく小さい時期は家に母親がいても、再び働くようになるというパターンとなっていくことにつながる可能性は高い。日本の経済成長が望めないとすれば、共働きへの動機づけは高くなるだろう。ワークライフバランスや男性の育児・家事参加が一層必要となるに違いない。

5 保育の長時間化

保育の時間は幼稚園も保育園も以前より長くなってきている。幼稚園の場合、預かり保育が広がり、通常の保育時間もたとえば午後1時すぎくらいまでだったが、午後2時あるいは3時にするところも増えてきている。保育園においては、長時間保育のニーズがますます増えてきており、それに保育園も応えるようになってきた。家庭にいる母親もパートタイムなどで働くようになってきているのかもしれない。保育園に子どもを通わせる母親の多くはフルタイムで働いているはずであるが、そういった人たちの労働時間が長くなってきているのかもしれないし、それは一時的な不景気によるものか、あるいはもっと長く続く傾向であるかはわからない。

そのことと関係するのだろうか、保育園児の母親のストレスが高くなってきているようである。従来、子どもを幼稚園に通わせることが多い専業主婦の母親と比べ、保育園に通わせることが多い常勤の母親は育児ストレスが低かったが、その差が縮まっている。保育の長時間化による親と子の負担が増加してきているのかもしれない。おそらく保育時間が11～12時間にもなれば、朝早く子どもを保育園に預け、夜7時くらいに迎えに行くことになる。その後、夕食やお風呂、遊びなどがあってから、寝かしつけるとなると、昼寝をしているので、遅めに寝てもよいにしても、そう気持ちのゆとりが持てそうにない。

もし他の助けがないとすれば、母親の育児は相当に負担が大きくなるのではないか。また働く母親が増えれば、その中にはそういったいくつもの要求を両立させてこなしていけるだけの高い動機と力量のある人ばかりでもないだろう。今後の追跡調査が必要となるところである。